

「焦らされて、恥ずかしい言葉まで言って、それで“乳輪だけ”だったら、どう思います？」

「.....や、やだ.....意味わかんない.....っ」

「じゃあ、やめときますか？」

「.....っ、ちがう.....やめたくない.....」

「じゃあ、ちゃんと.....言ってください」

「な、なにを.....？」

彼の指先は、まだ服の上から胸をなぞっているだけ。  
でもその熱は、じわじわと中まで浸透してくる。

「“乳輪だけでいいから、触ってください” って」

「っ.....ムリ.....そんな、こと.....言えない.....」

「さっき、“触って” ってお願いしたの、忘れましたか？」

「だ、だって.....っ、そんな.....恥ずかしい.....！」

「でも、今こうして――」

彼は、そっとブラウスのボタンに指をかけ、ひとつずつ外していく。

「自分からおねだりして、こんなに胸を開いて.....それで、“乳輪だけでいい” って言えないんですか？」

「っ、もう.....無理.....やだ.....！」

「なら、ずっと触りません。乳首も、乳輪も」

「.....っ、ずるい.....っ」

「素直になれない人には、快感は与えません」

悠人の声はやさしいのに、背筋がぞくりとするほど冷酷だった。

優香は唇を噛みしめながら、小さく、小さく呟いた。

「.....にゅ、乳輪だけで.....いいから.....触って.....ください.....っ」

「ん？ 聞こえませんでした」

「.....乳首じゃなくて.....乳輪で.....いいから.....お願い、触って.....っ」

その言葉を絞り出した瞬間、彼の指がようやく——そっと、乳輪のふちにだけ触れた。

「っ.....！！」

それだけで、腰が跳ねた。

彼は、中心には決して触れず、乳輪の周囲だけをゆっくり、じわじわ、なぞるように撫で続ける。

「どうですか？ “触ってる” なんですけど、“欲しいところ” には触れてませんよ」

「.....っ、も、もう.....無理.....っ」

「無理って言いながら、すごく感じてる。ほら.....」

彼はそっと、乳輪の端に指を当てながら、小さく円を描くように動かす。

それだけなのに、全身がびくびくと震えて、息が勝手に漏れる。

「ふふ、ここだけでこんなに反応するなんて.....ほんと、敏感ですね」

「ちが、う.....ちがう.....っ、そんなの.....」

「じゃあ、“違う” って言うなら、言ってみてください。“乳輪だけじゃ足りない” って」

「.....っ、い、言えない.....！」

「どうして？ 今、自分から“触って” ってお願いしたんですよ？」

「っ、だって.....恥ずかしすぎて.....っ、もう.....」

「でも、ここまで来たら.....あと一言言えたら、触ってあげます」

彼は、指先で乳輪をつんと押した。

「っ.....あ.....！」

「言ってください。“もっと奥まで.....触って” って」

「む、無理……っ、そんなの……」

「じゃあ、やめます」

ずっと、彼の手が離れる——その瞬間、反射的に手を伸ばしてしまった。

「……っ、や……行かないで……っ！」

「じゃあ……？」

「……っ、もっと……おくまで……触って……ください……っ……！」

言葉が出たと同時に、頬が熱くて、頭が真っ白になる。

なのに、それでも彼は——

「……ダメです。まだ言葉が足りない」

「っ、え……」

「“牛乳、もっと搾ってください”まで、言えたら——乳首に触れてあげます」